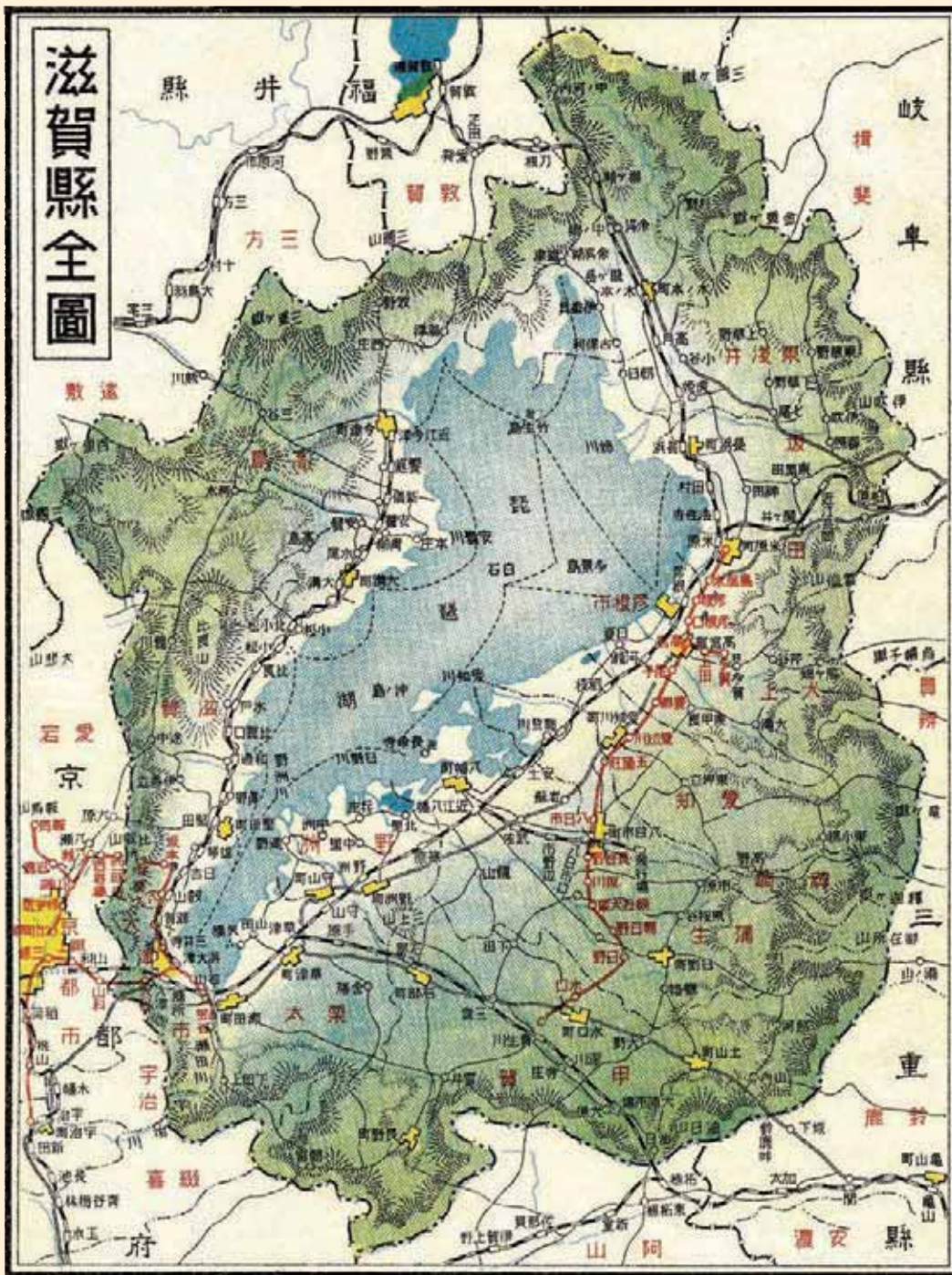


◇くらべてみよう

昭和13年(1938年)に発行された地図です。現在の滋賀県とくらべてみよう。



「滋賀県全圖」(高田真心堂、昭和13年5月10日発行、当館所蔵)

学校 年 組 番

名 前

滋賀県平和祈念館

〒527-0157 東近江市下中野町431番地 TEL. 0749-46-0300 FAX. 0749-46-0350



もっと知りたい

滋賀で学ぶ戦争の記録



滋賀で学ぶ戦争の記録

改訂版



滋賀県平和祈念館

◇はじめに

戦争があったころ、滋賀県でもいろいろなできごとがありました。
70年くらい前にあった戦争のことだから、そのことを知っている人は
だんだん少なくなってきました。

だから、みんなにも知ってほしいのです。

戦争があったころ、みんなの学校でおこったこととか、みんなのく
す地域でおこったことなどを知ってほしいのです。

戦争のことをしらべたり、戦争を体験した人の気持ちを聞いたりした
ら、きっとみんな戦争なんか大キライだという気持ちになると思います。

そして、そうした記録を残しておけば、戦争のころのことを知って
いる人がいなくなっても、戦争が大キライだという気持ちはずっと
伝わっていくと思います。

知ってほしい 地域にのこる戦争の記録。

語りついでほしい 平和へのねがい。

しらべることからはじめよう。



◇表紙の写真について

- ①小学生の絵「へいたいごっこ」
- ②勤労働員「落ち穂拾い」
- ③天虎飛行訓練所での訓練風景
- ④中学生の勤労働員・八日市飛行場
- ⑤出征兵士の見送り・豊郷駅
- ⑥長浜上空のアメリカ軍の飛行機
- ⑦女性たちの竹やり訓練
- ⑧国防婦人会の慰問袋づくり
- ⑨出征兵士の見送り・今津港
- ⑩疎開児童の新あつめ

滋賀で **学** **ぶ** 戦争の記録



滋賀県と戦争についてしらべましょう！

この本は、私たちの地域で戦争中におこった
いろいろなできごとをまとめたものです。

学校でつかっている教科書の内容について、
身近な地域の資料や体験談から、くわしくしらべ
られるようになっています。

また、地域の学習から発展させて、戦争当時の
ことをしらべる資料として使うことができます。

地図や年表のページを見ながらしらべること
ができ、どのページからでも読み進めることが
できます。

私たちがくらす滋賀県と戦争とのかかわりに
ついてしらべましょう。



滋賀県平和祈念館の外観

●目次

はじめに……………	1
学習の案内 目次……………	2
昭和初めの滋賀の風景……………	3
1. 15年にわたる戦争	
日本のできごと 滋賀のできごと…	5
滋賀の人々の戦場……………	7
滋賀県の軍需工場……………	9
滋賀県の軍事施設……………	10
2. 戦争と生活の変化	
戦地へ向かう、送り出す……………	11
女性たちの戦争 銃後の守り……………	12
モノ不足の世の中へ……………	13
3. 子どもたちと戦争	
はたらく子どもたち……………	14
学校と戦争 少国民と呼ばれた子どもたち……………	15
大阪から子どもたちがやってきた……………	16
4. 滋賀県への空襲	
空襲に備えて「ラ」の音がサイレンの音……………	17
爆撃された学校 空襲の被害……………	18
5. 戦争の終わり	
戦争が終わっても……………	19
6. 資料のページ	
関連MAP……………	20
資料解説……………	21
図書・ホームページの紹介……………	22

昭和初めの滋賀の風景



① 高島市：石田川 やな



② 高島市：琵琶湖畔 ヨシ立て



③ 高島市：安曇川 いかだ流し



④ 大津市：真野から見た琵琶湖や三上山



⑤ 大津市：瀬田川の蒸気船



⑥ 草津市：草津川トンネル



⑦ 栗東市：豆の収穫



⑧ 野洲市：野洲駅の学生たち



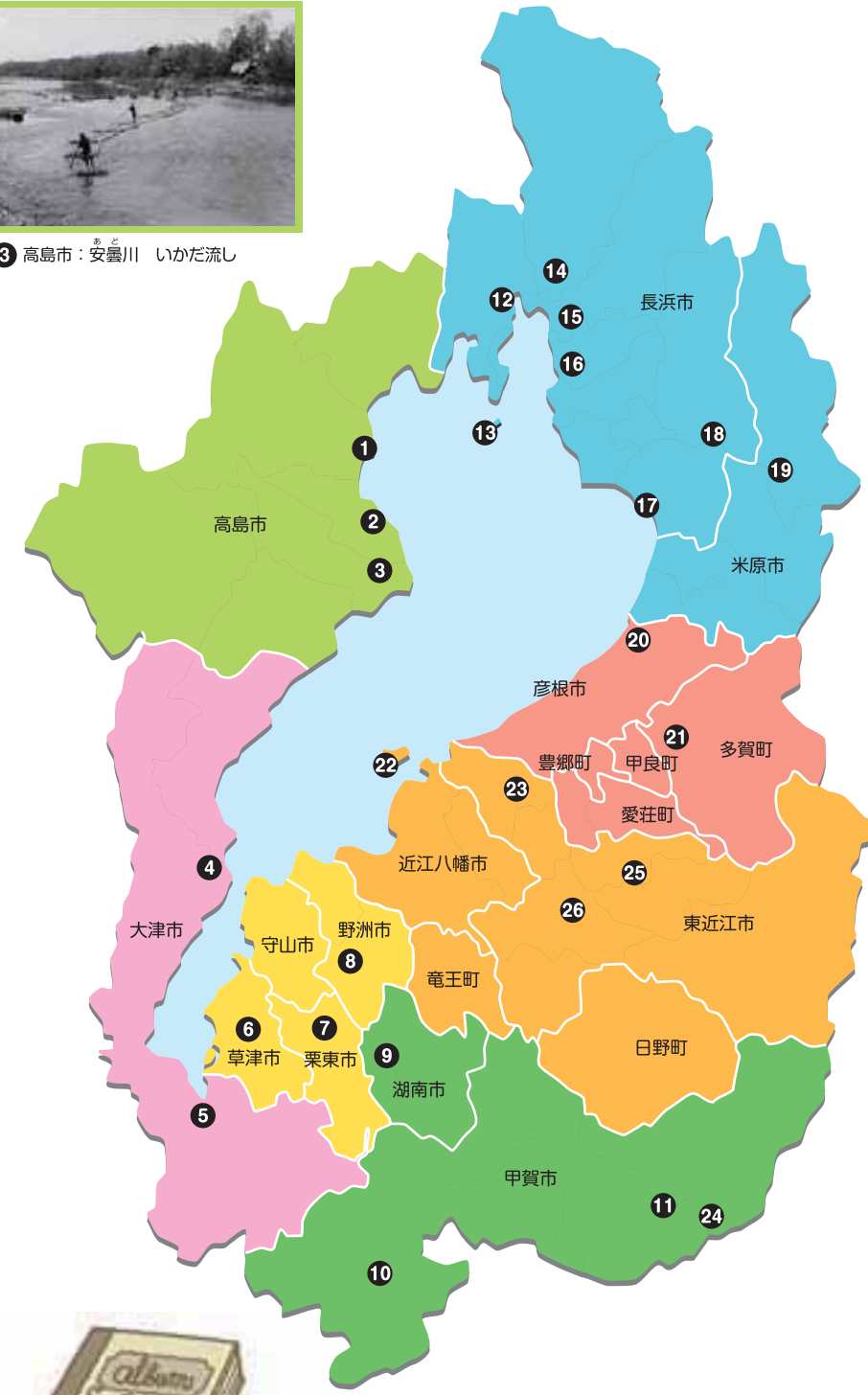
⑨ 湖南市：本石部の町並み



⑩ 甲賀市：信楽の登り窯



⑪ 甲賀市：大原貯水池



*昭和5年ごろから昭和30年ごろまでの写真をのせています。
地図上の番号は、写真が撮影されたおおよその位置を示しています。
市町名と区分は平成24年(2012年)3月現在のものです。



⑫ 長浜市：湖北隧道付近から見た山本山



⑬ 長浜市：竹生島 お参りの人々



⑭ 長浜市：余呉湖畔 田んぼでの農作業



⑮ 長浜市：木の本地蔵前の旧北国街道



⑯ 長浜市：高月 円行寺の疎開児童



⑰ 長浜市：曳山まつり



⑱ 長浜市：橋をかける工事現場



⑲ 米原市：伊吹山麓 上野地区消防自動車



⑳ 彦根市：魚の養殖に使われた彦根城の堀



㉑ 多賀町：多賀大社 国防婦人会の参拝



㉒ 近江八幡市：沖島の船だまり



㉓ 東近江市：能登川 水車のある風景



㉔ 甲賀市：鈴鹿峠 国道1号線のトンネル



㉕ 東近江市：大澤 八条溜のオオギ漁



㉖ 東近江市：八日市 栄町の夜市

日本のできごと 滋賀のできごと

→18 などの数字は、関連するページをあらわしています。

西暦	昭和	国内外的おもしろきこと	滋賀県のおもしろきこと
一九二七	二		青い目の人形が小学校などに配られる。→15
一九二九	四	<ul style="list-style-type: none"> 世界恐慌がおこる。世の中が不景気になり、失業者が増える。 	
一九三二	六	<ul style="list-style-type: none"> 満州事変がおこる。 	
一九三三	七	<ul style="list-style-type: none"> 「満州国」が建国される。 	<ul style="list-style-type: none"> 満州国への移住が勧められる。→7
一九三六	八	<ul style="list-style-type: none"> 二・二六事件がおこり、軍人が大臣らを殺害する。 日本が国際連盟を脱退する。 五・五事件で犬養毅首相が暗殺される。 	
一九三七	三	<ul style="list-style-type: none"> 日中戦争がはじまる。 	<ul style="list-style-type: none"> 滋賀県からの満州農業移民に30人を決定する。
一九三八	三	<ul style="list-style-type: none"> 「国家総動員法」ができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 「燈火管制」規則により、屋外の電灯が制限される。
一九三九	四	<ul style="list-style-type: none"> 「国民徴用令」が公布される。 ノモンハン(満州国と現在のモンゴル国境)で日本軍とソ連軍が戦闘。 	<ul style="list-style-type: none"> 県内で女子勤報隊が結成される。
一九四〇	五	<ul style="list-style-type: none"> 第一次世界大戦がはじまる。 大政翼賛会が結成される。 日独伊三国軍事同盟→アメリカ、イギリスなどの連合国と対立する。 	<ul style="list-style-type: none"> 大津市で近江神宮の建設がはじまる。
一九四一	六	<ul style="list-style-type: none"> 「国民学校令」が公布され、全国の小学校が「国民学校」になる。→15 「金属類回収令」が公布され、家庭のなべ、寺の鐘なども集められる。→16 太平洋戦争がはじまる。 	<ul style="list-style-type: none"> 県内で代用燃料車が走るようになる。
一九四二	七	<ul style="list-style-type: none"> ミッドウェー海戦で日本海軍が敗北し、戦いが不利になつていく。 衣料の点数切符制がはじまる。→13 日本陸軍がマレー半島に上陸し、海軍はハワイの真珠湾を攻撃する。 	<ul style="list-style-type: none"> 大津陸軍少年飛行兵学校が開校される。→10 小中の湖の干拓工事がはじまる。→14 滋賀県が新と木炭生産の重点県に指定される。 滋賀県の金属供出が全国4位となる。→15 大津海軍航空隊が設置される。→16
一九四三	八	<ul style="list-style-type: none"> イタリヤが降伏する。 日本軍がガダルカナル島からの撤退をはじめる。 	<ul style="list-style-type: none"> 県外の大学生が、食糧増産のため滋賀県に来る。
一九四四	九	<ul style="list-style-type: none"> 学徒出陣で大学生も兵士となる。 サイパン島の日本軍約3万人が全滅する。 日本海軍がマリアナ沖海戦で敗北し、多くの航空機を失つ。 	<ul style="list-style-type: none"> 入江内湖、松原内湖など40力所の干拓事業が計画される。→14
一九四五	一〇	<ul style="list-style-type: none"> ポツダム宣言が発表される。 日本の中小都市への空襲が激しくなる。→17 ドイツが無条件降伏をする。 アメリカ軍が沖縄に上陸する。 硫黄島の日本軍守備隊約2万3千人が全滅する。 ソ連のヤルタで米英ソの代表が会談し、協定を結ぶ。 東京、名古屋、大阪などの大都市への空襲が激しくなる。→16 学徒勤労令が公布され、中学生以上の全生徒が工場などで働く。→14 米軍のB29爆撃機が東京を初めて爆撃する。 集団学童疎開が始まる。→16 	<ul style="list-style-type: none"> 小学校で教科書に墨を塗る。(2学期)→19 大津にある東しの工場に模擬原爆が投下される。→9 県内への空襲が激しくなる。→18 滋賀県に捕虜収容所が設置される。→10

滋賀の人々の戦場

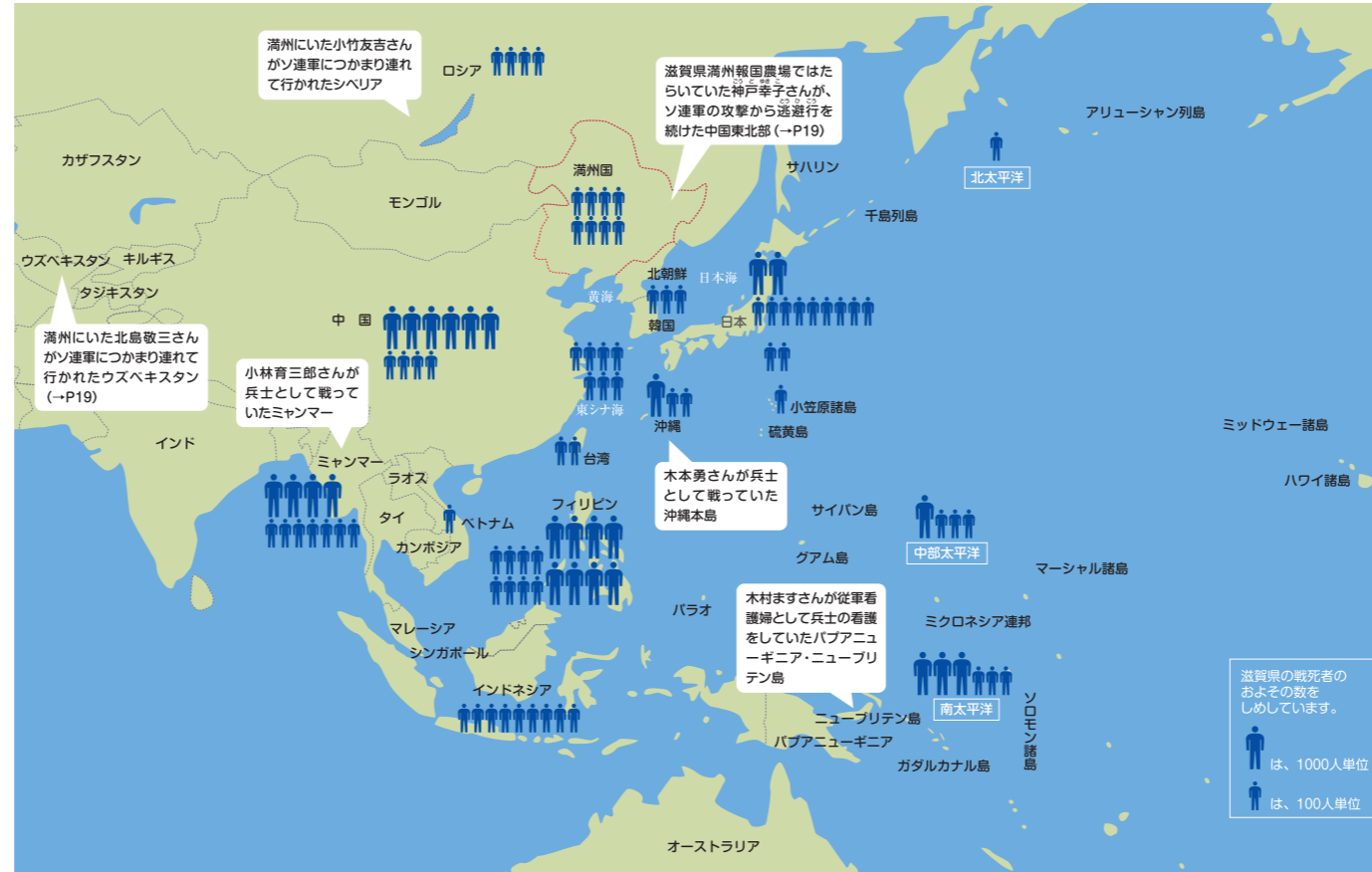


日本軍は、アメリカ、中国、イギリス、オランダ、オーストラリア、インドなどの軍隊と戦いました。滋賀県からはのべ9万人以上の方が兵士として戦場に行き、アジアから太平洋に広がる地域で戦いました。

日中戦争から太平洋戦争にかけての戦争で、死亡、行方不明となった日本軍の兵士や軍属(軍隊に雇われた人々)は約230万人とされています。そのうちの3万人以上が滋賀県出身の人でした。

戦場となった東アジアや東南アジアでは、約2,000万人もの兵士や一般市民が犠牲になったといわれています。

※下の地図は、原則として現在の国名(略称を含む)・地域名を記していますが、戦争当時に一般に使われていた地名等の表記も使用しています。また、国・地域や国境については、現在と戦争当時とは異なる場合がありますので、おおよその範囲であることに注意してください。



滋賀県民の戦死者数(昭和初期から)

国・地域など	戦死者数(人)
フィリピン	8,843
インドネシア	871
ベトナム・ラオス・カンボジア	106
インド・ミャンマー・タイ・マレーシア・シンガポール	4,668
中国	6,395
中国東北部(旧満州)	839
台湾	193
朝鮮半島	251
ロシアなど(旧ソ連)	420
千島列島・サハリン・アリューシャン列島(北太平洋)	137
パラオ・ミクロネシア連邦・マーシャル諸島(中部太平洋)	1,356
ソロモン諸島・バブアニューギニア(現在のインドネシア・バブア州含む南太平洋)	3,317
黄海・東シナ海	700
沖縄	1,229
小笠原・硫黄島	119
日本近海	184
日本国内	2,864
その他	100
合計	32,592

※資料：滋賀県史 昭和編第二巻

◆戦場に送られた人々

20歳になった男の人は、だれもが徴兵検査(兵士になるための検査)を受けるように義務づけられていました。徴兵検査に合格した人は軍隊に入り、兵士として戦場に送られました。

兵士以外にも、軍隊に関係する仕事(工具、船員、調理師、技術者、大工、事務員、通訳など)のために軍隊に雇われた軍属と呼ばれる人々や、戦場で傷ついたり、病気になったりした兵士を看護する看護婦(看護師)などが、戦場に送られました。

14歳で満州へ

昭和14年1月、14歳の小竹友吉さんは、学校の先生のすすめもあり、「満州開拓青少年義勇隊」に入隊し、満州(いまの中国東北部)に渡りました。義勇隊は、15歳から18歳ぐらいの少年で組織され、開拓民として農業をするだけではなく、国境や鉄道などの警備をする役割も求められました。昭和20年5月、満州で20歳になった小竹さんは、兵士として現地の部隊に入隊しました。8月、ソ連軍との激しい戦闘の後、たくさんの兵士とともにソ連軍にとらえられました。小竹さんは、シベリアのタイшетというところに連れて行かれ、線路を敷く仕事などで働かされました。厳しい寒さやケガ、病気のためにたくさんの人が亡くなりました。小竹さんがふるさとの日野に帰ることができたのは、終戦から4年目の昭和24年8月でした。

5分間が生と死の分かれ目

昭和19年、守山市の小林育三郎さんは、戦況が厳しいビルマ(いまのミャンマー)の戦場に送られました。中隊長が戦死し、小林さんはその後任となり、指揮する小隊を離れました。その5分後に、小隊の兵士が敵の戦車の攻撃にあい、全員戦死しました。たった5分という時間の差が小林さんの生と死を分けたそうです。

従軍看護婦として戦場へ

野洲市の木村ますさんは、日本赤十字社滋賀県支部救護看護婦養成所を卒業しました。昭和14年、ますさんが最初におもむいた中国からは昭和16年に無事帰ってくることができました。2年後、再び通知が来て、ニューブリテン島(赤道よりも南にある島)のラバウルやフィリピンのマニラで看護にあたりました。爆撃が激しくなってきたためにジャングルに逃げたものの、食料や薬が底をつき、一日に何人も兵士が亡くなっていったそうです。

戦場となった沖縄で

昭和20年(1945年)4月以降、アメリカ軍の激しい攻撃にさらされた沖縄本島で、木本勇さんが所属していた部隊が全滅しました。木本さんは、首里城地下壕から沖縄本島の南端・摩文仁のガマ(岩穴)に移動しました。移動する道中や壕、ガマで、たくさんの兵士や住民の死を目にしました。摩文仁で負傷し、アメリカ軍の呼びかけに応じて捕虜となり、翌年、ふるさとの野洲に帰ることができました。

滋賀県の軍需工場

戦争には、ヒトやモノが必要となります。ヒトとは兵士のことで、モノとは戦争をするための飛行機・軍艦・大砲・爆弾・銃・弾などの兵器、戦う兵士の食べモノや着るモノなど生活するのに必要なすべてのモノです。これらを「軍事物資」「軍需品」といいます。つくるところを「軍需工場」と呼びました。

戦争が長びくにつれて、多くの人が兵士として戦地に行きました。そのため、工場で働く人がだんだん少なくなり、女の人や子どもたちも軍需工場や農場などで働くことになりました。小学校には、6年生の上に高等科というのが2年間ありましたが、昭和20年(1945年)4月、政府は高等科の子どもたちは1年間授業しないことを決めました。これは、小学生が働くようにするためでした。こうして、戦争が終わるころには、子どもたちの多くは勉強するよりも、働く時間の方が多くなっていきました。



陶器製の地雷 (直径約30cm)
甲賀市の信楽焼はタヌキの置物が有名ですが、戦時中は、多くの窯で地雷や手榴弾もつくられていました。金属が不足したため、焼き物でつくりました。しかし間もなく終戦を迎え、実際の戦闘では使われなかったとされています。



戦闘機の組み立て
彦根市にあった絹糸を作る会社「近江絹糸績」(いまのオーミケンシ)は、昭和18年に「近江航空工業株式会社」を設立して、昭和20年には戦闘機の零戦も組み立てていました。

スパイに知られるとこまる

奥田博さんは、信楽国民学校を卒業すると、お父さんの仕事を手伝って陶器製の地雷の材料をつかっていました。それは秘密でつくっていたから、ときどき軍隊の人が来て「スパイに知られるとこまるから、何をついているのかはしゃべるな」と言われていました。



◆模擬原爆が落とされた工場



空から見た東洋レーヨンの工場(昭和22年撮影、写真右上は石山駅)

大津市の「東洋レーヨン」(いまの東レ)は、レーヨンなどの化学せんいをつくる会社として、大正15年に創業しました。戦争中は魚雷などの兵器もつくっていました。

昭和20年7月24日、大津の工場に米軍B29爆撃機からパンブキン爆弾(模擬原爆)が投下され、死者が16名、負傷者が100名以上という大きな被害が出ました。

パンブキン爆弾とは、本物の原爆と同じ形・重さになるようにつくったものです。原爆投下の訓練のために投下し、全国各地に多くの犠牲者を出しました。

滋賀県の軍事施設



戦争中の滋賀県には、「軍需工場」だけではなくて、兵士の訓練をする施設や、戦地へ向かう航空機のための飛行場などの「軍事施設」もありました。

神崎郡八日市町(いまの東近江市)には、大正時代はじめに民間の飛行場がつけられました。大正11年(1922年)からは、陸軍の部隊が八日市飛行場を使うようになりました。飛行場では、訓練を受けたパイロットや整備士による部隊が編成され、八日市から戦地へと向かいました。戦争末期には、地元の人を含めて約1000人が飛行場や整備工場に働いていたといわれています。

滋賀県内のおもな軍事施設



また、大津市には昭和16年(1941年)以降、大津海軍航空隊、滋賀海軍航空隊、大津陸軍少年飛行兵学校など多くの軍事施設が設けられました。高島市では、広大な饗庭野演習場が軍事訓練のために使われました。

さらに昭和20年(1945年)には、野洲市、東近江市、米原市に大阪の捕虜収容所の分所がつけられました。県内3カ所あわせて約700人の捕虜(戦争中に日本軍がとらえた敵の兵士など)が収容されていました。捕虜は琵琶湖内湖の干拓や農作業などの仕事をさせられていました。



八日市飛行場の門
八風街道沿いにあった八日市飛行場の門。右側の門柱には「中部第九十四部隊」と書かれた札がかけられています。レンガ造りの門柱は、現在、八日市の沖原神社横の公園に保存されています。

◆中学生の飛行訓練

大津には大津陸軍少年飛行兵学校がありました。入学した14~15歳の少年たちが、グライダーなどを使ってパイロットになるための基礎的な訓練を受けました。昭和19年6月からは、大津市内の中学生が少年飛行兵学校で飛行訓練などの軍事教練を受けるようになりました。



大津陸軍少年飛行兵学校の訓練風景



天虎飛行訓練所の訓練風景
昭和10年、大津市馬場に開設された民間の飛行訓練所。戦争末期になると、軍隊の要請により海軍予備学生の訓練所となり、特攻の訓練なども行われました。

戦地へ向かう、送り出す



20歳になった男の人は、だれもが徴兵検査を受けるように義務づけられていました。徴兵検査に合格すると、軍隊に入りなさいという通知書(「現役兵証書」)が届きました。

戦争が長びき、はげしくなってくると、「召集令状」が届き、たくさんの男の人が召集されました。また、何年も戦地に行って役目を果たし、やっと家に帰ってきたのに再び召集されて、戦地に行く人もしだいに増えていきました。人々は戦地に行くことはぜったいに断ることはできませんでした。

やがて、20歳にならなくても兵士に志願できる陸軍少年飛行兵や海軍飛行予科練習生などの制度を通じて、いまの中学3年生から高校生くらいの人も兵士として軍隊に入ることをすすめられるようになりました。

お家の人や近所の人たちは「無事に帰ってきて」「早く帰ってきて」という気持ちをおさえて、「バンザイ、バンザイ」とか「がんばって」と言って出征する人たちを見送りました。



徴兵検査(大津公会堂)

徴兵検査に合格すると、召集令状(赤紙)が届き、入営(軍隊に入ること)しました。



豊郷駅での出征風景

応召(召集されて軍隊に入ること)はとても名誉なこととされ、家族や地域の人たちがぎやかに見送りました。



今津港からの出征風景

地域の男の人が軍隊に入るときには、列車やバスを利用することが多かったのですが、大津市堅田港や高島市今津港などでは、船で出発した人もいました。

女性たちの戦争 銃後の守り

戦争がはげしくなると、多くの男性が兵士として戦地へ送られました。そのため地域で中心となって活動したのは、女性たちでした。女性たちは婦人会を組織して、千人針や寄せ書きを集めて兵士を見送ったり、慰問袋をつくったりしました。兵士を送り出した家では、かげ膳を供えて夫や息子、兄弟の無事を祈りました。

また、米や麦・イモなどの農作物を作って国へ差し出すこと(供出)や空襲に備えた防空訓練、国内が戦場になったときに備えた竹やり訓練など、女性たちも戦争中心の生活となりました。

こうした戦争を支える地域や人びとのことを「銃後」と呼びました。



千人針

細長い白布に、千人の女性が赤い糸で一つずつ、多くの糸の結び目をつけたもの。これを腹に巻いていると弾丸があたらないといわれていました。



慰問袋

日用品や娯楽品をつめ合わせて入れた慰問袋は、戦地の兵士をはげますために送られました。



婦人会の慰問袋づくり

女性は、結婚すれば婦人会に入らなければなりません。婦人会では、慰問袋づくり以外にも、千人針づくり、出征の見送り、竹やり訓練、消火訓練でバケツリレーの練習などもしました。

見送りの私らもずっと泣いていました

大津市の藤井清子さんは、堅田港での見送りのようすを次のように話してくれました。

「みんな、ここの人は伊豆神社によっておはらいして、堅田港から出征しましたね。うちの近所に住んでおはった人が出征はったときはいまでも忘れられません。その人もうちの子と同じくらいの生まれたての赤ちゃんをおいて行かれました。みんなで棧橋まで送っていきました。その人は、下を向いてずっと泣いてはりました。船から泣いているのが見えまっしやろ。それを見て、見送りの私らもずっと泣いてましたわ。」

5人の子ともと必死に生きた戦中、戦後

高島市の竹井静さんは、日用雑貨・たばこ店を営む角蔵さんと結婚しました。静さんは、角蔵さんの出征後、ひとりで家族を支えました。

「主人が出征した時分はまだよかったです。うちの店にも売るものがありましたけども、だんだん、だんだんなくなって。ほんまにきびしかったのは、戦後です。店には何も売るのがのうなって。ほんで、たまに、タバコと砂糖の配給もんがチョコチョコと。子どもたちは、みんなよう手伝ってくれました。昔はみんな手仕事でしょ。そうじに風呂たぎ。お風呂は井戸から水をくんできて、まきでたく。こんなことはみんな子どもの仕事でした。」静さんは当時のきびしかった生活をふり返ります。



角蔵さんと写した家族写真

モノ不足の世の中へ

戦争のため、軍隊で使うものの生産が優先され、生活に必要な品物が不足するようになりました。生活に必要な食料や日用品などを手に入れるためには、家族の人数に応じて政府が発行する切符(買える数量が書かれた購入券)や配られる数量が書かれた通帳などが必要となりました。このようなしくみを「切符制」「配給制」といいます。戦争が長びくにつれ、米や調味料、衣服などが「切符制」「配給制」となり、自由に売り買いできなくなる品物がしだいに増えていきました。

また、鉄砲や弾など兵器をつくる材料となる鉄や銅なども不足しました。政府は、「金属類回収令」という命令を出し、お寺の鐘をはじめ、家庭で使っている金属製の火鉢や鍋、釜などを差し出すこと(供出)を求めました。

人びとは、木や竹、陶器など身の回りにある材料で作った「代用品」を使って生活しました。

戦争にかり出された家庭用品

終戦の少し前、東近江市の羽田昌次さんは家にあった真ちゆう(金属)製の宣徳火鉢を供出しました。その火鉢は大切な行事に使うもので、お正月でも使わず、よほどのおめでたいことなどのときに使うものでした。木製の台をはずし、火鉢の部分だけを近くのお寺へ持っていきました。そこには、あちこちの家庭から供出された金属類が山のように積まれていました。火鉢は、その場で村の人が金づちでたたいてこわしたそうです。羽田さんは「たぶん、二度と使えないように、また横流ししたり持ちさられないようにするためだった」と思っています。

◆代用品

木や竹、陶器、紙など身のまわりにある材料を代用しているいろいろな家庭用品が作られました。やがて、陶器製の地雷や手榴弾のような武器もつくられるようになりました。



衣料切符
衣料は、学生服上下32点、長袖シャツは12点、靴下は2点という点数制になっていて、ほしいものを買うためには、点数分の切符と代金が必要でした。



宣徳火鉢や鉄瓶の供出(高島市・昭和17年)



釣鐘の供出(東近江市)
金属が不足したため、各寺院からも強制的に釣鐘が集められました。

はたらく子どもたち

戦争が長びくと、多くの男性が戦争にかり出され、働ける大人が少なくなってきました。そこで、いまの高校生や中学生にあたる生徒たちも大人の仕事を手伝うことになりました。学校の授業はほとんどなくなり、かわりに兵器を作る工場で働いたり、農作業の手伝いをしたりしました。これを「学徒勤労働員」といいます。

また、長びく戦争のため食べ物が不足してきたので、政府がお米などをたくさん作る計画を全国各地ですすめました。

滋賀県では、食糧増産のために琵琶湖のまわりにある内湖や湿地の水をぬいて田畑にする干拓が行われました。

その作業には、大人や捕虜、それに学校の生徒たちも動員されました。



昭和19年に計画されたおもな干拓事業

昭和19年3月、滋賀県は食糧増産のため、内湖や池、沼、水路など40か所を干拓して、田んぼを増やす計画をたてました。(地図には、40か所のうち、面積が広がった17か所を当時の呼び方で示しています)

〔琵琶湖干拓事業計画書〕(昭和19年、滋賀県)より作成

勉強はぜんぜんありませんでした

甲賀市の上村清子さんは、昭和19年4月、水口高等女学校(今の水口高等学校)5年生になりました。「5年生になったら、勉強は全然ありません、真綿づくりばかりでした。学校のろうかにはダァ〜とタライが並んでました。みんなタライの前にこしかけてやっていた。だから教室は空っぽ。」とそのころのことをふり返っています。

真綿は軍隊が使うパラシュート(落下傘)になるのだと上村さんたちは聞かされていました。

今も残る承水路

東近江市五個荘にあった神崎商業学校(八日市南高等学校の前身)に通っていた辻昭三さんは、三年生の時に、松原内湖(彦根市)や小中の湖(近江八幡市)の干拓作業に参加しました。

「内湖を干拓するために、承水路という川を掘るんです。そこから水を外に出して、干し上がして田んぼにするんです。私が作業に関わったのは現在の近江高校や彦根のグラウンドになっているあたりです。承水路は今も残っています。」



入江内湖の干拓作業(米原市)



水口高等女学校のろうかで真綿をとるようす
〔写真週報〕340号 昭和19年9月27日号より

学校と戦争 少国民と呼ばれた子どもたち

昭和2年(1927年)、友好のしるしとしてアメリカから日本に、1万2千体以上の「青い目の人形」が贈られました。人形は、抽選で選ばれた全国の小学校や幼稚園に届けられ、滋賀県の子どもたちも大喜びでむかえました。しかし、太平洋戦争が始まると、敵国の人形だという理由で、軍の命令により、人形が焼かれたり、こわされたりしました。

昭和16年(1941年)、小学校のよび方が「国民学校」にかわると、学校は授業の内容や作業にも戦争への協力が求められるようになりまし。また、子どもたちは「少国民」と呼ばれ、「子どもでも立派な国民で、戦争に協力しなければならない。」と教えられました。木銃(木でつくった銃の模型)を使って戦争の訓練をする授業が行われたり、運動会では、紙にかいたアメリカやイギリスの旗をふみながら行進したりしました。



青い目の人形歓迎会
長等国民学校(いまの長等小学校)での歓迎会のようす



「尋常小学校」から「国民学校」へ
「堅田国民学校」と書かれた新しい銘板(学校名が書かれた札)を校門に取り付けているようす(いまの堅田小学校)



木銃をもって運動会
豊国民学校(いまの愛知川東小学校)の運動会で訓練の成果を発表しているようす

おお さか 大阪から子どもたちがやってきた



疎開先へ向かう大阪の子どもたち
(昭和19年9月・近江今津駅)



荒れ地を畑にする開墾作業
海津国民学校(いまのマキノ東小学校)に疎開した子どもたちの開墾作業

東京や名古屋、大阪などの都市では、はげしくなる空襲にそなえ、子どもたちは空襲の少ない地方に学校ごとにまとまって移動し、生活することになりました。これを「集団学童疎開」といいます。

昭和19年(1944年)、2学期のはじめごろ、大阪から1万人以上の子どもたちが滋賀県にやってきました。国民学校3年生から6年生の子どもが中心で、お父さんやお母さんと離れてくらすことになりました。昭和20年(1945年)8月にようやく戦争が終わりでしたが、子どもたちが大阪に帰れたのは10月でした。そして、子どもたちを待っていたのは、空襲で焼けてしまった大阪のまちでした。

疎開先での暮らし

大阪市内の国民学校4年生だった大海幸夫さんは、南杣国民学校(いまの甲南第二小学校)に集団疎開しました。「更生園」という男子寮では、23人の男の子と学校の先生や寮母さんなどが生活していました。冬を迎え、寒さにふるえながら、寮から遠い山の中腹にある井戸まで水くみに行かなければならない毎日でした。乏しい食糧のため、自給自足ということで、寮のまわりの荒れ地を開墾して畑も作りまし。「学校へ行っている間は天国みたいなもんですね。何も作業せずに授業を受けられるわけですから。でも、寮に帰ると農作業が待って。そして、いつも腹すかして…」とつらかった日々のことを話してくれました。

24人のかわいい妹たち ~寮母をしていた吉坂ちえさんの話~

「私は先生の補佐役で、食事の準備をしたり、順番に耳の掃除や爪切りしたり、ほんま、家庭的に一生懸命にあげたんですわ。」家族と離れ心細い子どもたちを親身に世話する吉坂さん。保護者からはとても家庭的な寮生活を送っていると感謝されたそうです。

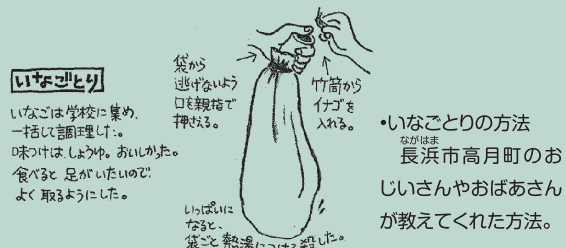
「大変なこともあったけど、かわいいもんや。もう家族といっしょですのね。自分の妹がにわかになんか増えたなというかんじ。お母ちゃんのはたにいたらもつと甘えられるのになと思うので、できるだけことはしてあげようと思てました。」



疎開した子どもたちの薪運び
吉坂さんが寮母をしていた女子寮「南杣寮」(いまの甲賀市甲南町)の子どもたちが、薪(燃料にするための木材)を運んでいるようす

食べ物を見つける授業

昭和17年の4月から、上田上国民学校(いまの上田上小学校)の先生になった芥川美栄子さん。子どもたちをつれて草つきに行ったり、イナゴとりに行ったりしました。食べ物を自分たちで見つけるのも、授業のひとつだったのです。



飛行機の絵をかいたら、二重丸をくれるんです



昭和19年、長浜国民学校(いまの長浜小学校)1年生だった武田倫江さんが描いた飛行機の絵。
「紙の切りぬき細工でも、先生から軍艦の絵なんかをかいたものをもらいました。もう『お国のために』ということが頭にこびりついていました。軍艦の絵とか飛行機の絵をかいたら、先生は二重丸をくれるんです。」と、武田さんは当時のことをふりかえています。

空襲に備えて 「ラ」の音がサイレンの音

飛行機から、爆弾を落としたり、人や家を燃やす焼夷弾を落としたり、機関銃で攻撃したりすることを「空襲」といいます。東京や名古屋、大阪では大きな空襲がありました。

アメリカ軍が空襲を行うとき、琵琶湖が目的地を確認する目印となりました。そのため、滋賀県の上空を爆弾をつんだアメリカ軍の飛行機が通ることになり、空襲を知らせるサイレン（空襲警報）がたびたび鳴りました。

地域では、空襲に備えて、避難や救急、消火活動などの訓練が行われました。

子どもたちは、空襲から身を守るための防空頭巾をもって登下校しました。



「ラ」の音が空襲警報のサイレンの音

篠原国民学校（いまの篠原小学校）の子どもたちは小林幸子先生にオルガンの「ラ」の音が空襲を知らせるサイレン（空襲警報）の音だと教えてもらいました。日本を空襲するアメリカの飛行機「B29」の音もオルガンの音で教えてもらいました。やがて、子どもたちは空襲警報のサイレンの音とB29の飛んでくる音を、毎日のように聞く日がやってきました。

カモフラージュ大作戦

講堂の屋根に、上級男子生徒や先生の手で木や枝が一面にのせられ、上空からのカモフラージュのため、何日も作業が続けられました。私たちは、家から鍋墨とすずをかき集め、古紙に包んで、学校へ集合し、水と溶け合わせ、講堂の白壁や白ペンキをまっ黒に塗りつぶす作業を全校生が力を合わせて完成させました。この作業で使うはしごを肩に担いで学校まで持ってくる時の重たかったことは、今でも忘れられません。

（甲賀市信楽町 杉本加代子さんの体験談より）



特集記事「防空壕をつくるなら」
雑誌には、家の近くの地面に穴を掘って防空壕（空襲から身を守るための避難場所）を作ることをする特集記事が載りました。説明には「幅100cm、高さ140cm、腰掛の長さ一人あたり45cm」と書かれています。（写真週報）184号 昭和16年9月3日号より）



飛行機をかくした掩体壕（東近江市）
八日市飛行場の飛行機を空襲からまもるためにつくられたコンクリート製掩体壕



火事に備える防火水槽（大津市浜大津）
空襲による火事に備えて、水が溜めてありました。



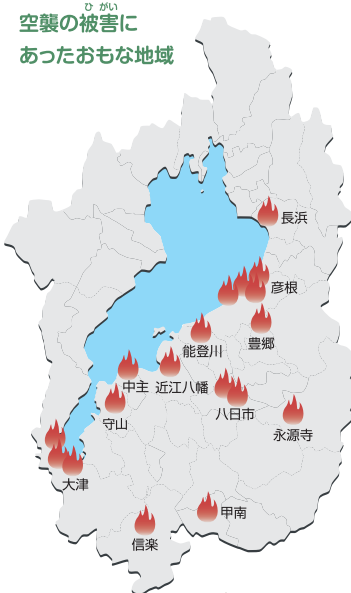
西黒田国民学校（いまの長浜南小学校）で行われた消火訓練の様子

爆撃された学校 空襲の被害



滋賀県内では昭和20年（1945年）5月から、軍事施設や軍需工場（兵器などを作る工場）があった地域を中心にたびたび空襲がありました。また、学校や駅、人が乗っている列車への空襲もありました。県内では50人以上が亡くなり、180人以上の人たちがケガをしました。

滋賀県への空襲は、東京や大阪などの都市と比べると、大きな爆弾や焼夷弾を落とされることは少なかったのですが、飛行機の機銃掃射による攻撃がたびたびありました。助かった人は、「パイロットの顔が見えるくらい飛行機が近づいてきて撃つので、とてもこわかった」と話しています。



空襲の被害にあったおもな地域

爆撃された学校



水野道子さんは、昭和20年4月に彦根市の城南国民学校（いまの城南小学校）の先生になりました。6月26日の朝、学校に空襲を知らせるサイレンが鳴りひびいたので、水野先生たちは、登校してきた子どもたちをすぐに家に帰しました。先生たちは学校に残っていて、空襲にあいました。爆風で校舎の窓ガラスはほとんど割れて、校舎の壁には爆弾の破片などが無数に突き刺さっていました。学校の近くでは、この空襲で何人も人が亡くなりました。近所の人たちは、学校にいた先生たちも死んでしまったと思ったのですが、防空壕に入っていた水野先生たちは無事でした。城南小学校には、その時の爆弾の破片や爆撃でへこんだあとが今も残されています。

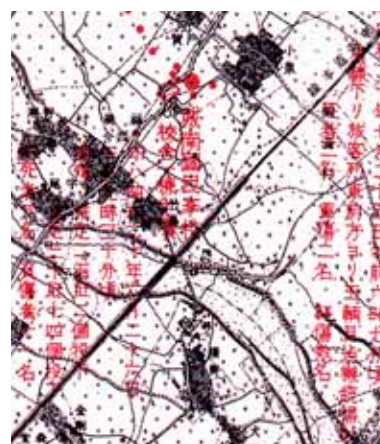
ほかにも、八日市飛行場に近い御園国民学校（いまの御園小学校）にも空襲があり、今でも銃弾のあとが校庭の石に残っています。



長浜上空のアメリカ軍の飛行機
鐘淵紡績長浜工場が空襲された日に地上から撮影された写真（昭和20年撮影）



城南小学校のロタン像（左）にのこる銃弾のあと（右）



彦根市の戦災概況図

この図の中央上が城南小学校です。戦災概況図には、場所、日時、死者やけがの人数、建物の被害状況、落とされた爆弾の種類や数などが赤い文字で書かれています。また、爆弾が落とされたところが●印で示されています。

（資料提供：国立公文書館）

戦争が終わっても

昭和20年(1945年)8月15日、昭和天皇がラジオを通して日本の降伏を国民に伝えました。戦争が終わり、海外にいた日本人の帰国、日本にいた朝鮮や中国の人々の帰国が始まりました。しかし、海外で終戦をむかえた兵士や満州などに移り住んでいた人々の中には、戦争が終わってもなかなか日本に帰ることのできない人や亡くなった人がおおぜいいました。

15年にわたる戦争で、たくさんの人が家族や家を失ったり、食べ物や物資が不足したりして苦しい生活が続きましたが、戦争が終わったことにより、安心して生活できるようになりました。そして、しだいに人々が夢や希望を持てる世の中になっていきました。

とにかく食べるものがなかった

東近江市の中島伸男さんは、戦争が終わったとき、小学5年生でした。戦争中も食べ物は不足していましたが、戦争が終わると、ますます食べ物は少なくなりました。お父さんが失業し、お米も野菜もほとんど買えないので、お腹をふくらせるために道ばたに生えている雑草をつんできてお米に混ぜて食べていました。いくらお腹が減っていても「おいしい」とは思いませんでした。

先生に言われたところを墨で消しました

戦争が終わり、2学期になって子どもたちがしたことは、教科書に墨をぬることでした。先生に言われたところを墨で消して授業で使いました。戦争のことや、飛行機の絵なども墨で消しました。

右の写真は、当時、彦根市の高宮小学校の4年生の担任をしていた橋本武浩さんが、子どもたちとともに墨を塗った音楽の教科書です。「日本海海戦」「われは海の子」「落下傘部隊」などのページや歌詞に墨が塗られています。



燃やされる飛行機
終戦後、占領軍により兵器や軍事施設などは処分されました。八日市飛行場も戦後まもなく閉鎖され、農地や工場、住宅地になりました。(八日市飛行場・昭和21年2月撮影)



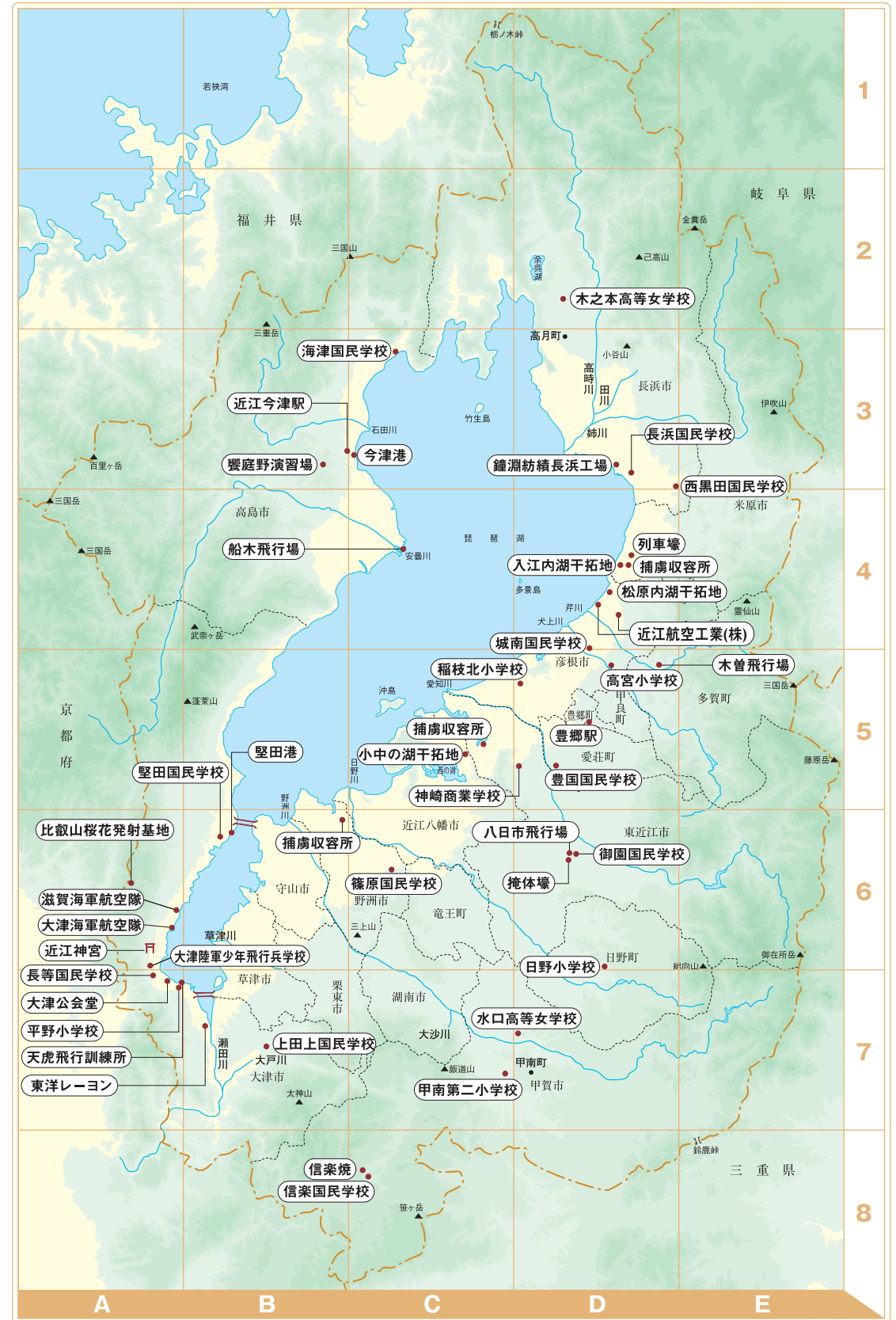
滋賀県満州報国農場勤労奉仕隊の旗
戦争当時、学校の先生をしていた神戸幸子さん(米原市)は、10代後半の若い勤労奉仕隊の隊員を引率して満州に渡りました。昭和20年8月9日、ソ連(いまのロシア)が参戦し満州などに攻め込んできました。ソ連軍の攻撃から逃げ、終戦後も逃避行は続きました。神戸さんがこの旗を持ち、やっとの思いで日本に帰れたのは昭和21年10月でした。

戦争が終わっても

甲賀市の北島敬三さんは「戦争が終わって、満州でソ連軍につかまった。日本に帰れると言われて列車に乗りこんだら、日本から遠く離れた砂漠(いまのウズベキスタン)に連れて行かれた。そこでつらい仕事をさせられて、亡くなる人が多かった。私は2年後に日本に帰れたが、その後もなかなか日本に帰ることのできない人や亡くなった人がおおぜいいた。」と当時をふり返っています。

※下の地図に、本文や体験談、資料のページなどで紹介した施設や地名のおおよその位置を示しています。市町名と区分は平成24年(2012年)3月現在のものです。

関連MAP



資料解説

◇軍事郵便

戦争中に、戦地と家族の間で交わされたハガキや手紙。戦地にも郵便局が作られ、郵便物の集配を行いました。軍隊や行先に関する内容はチェックされ削除されました。



写真は、ニューギニア島の部隊にいた西村浅吉さんが国民学校2年生だった息子の宏一郎さんにあてたハガキです。

▶関連ページ→P7・P8

◇軍事教練

中学校や青年学校では射撃練習やグライダー訓練などが授業としてありました。県内の中学生が饗庭野演習場に集まって行う軍事訓練もありました。高等女学校でも、銃を扱う練習や銃剣術などの訓練が行われました。



写真は木之本高等学校の女生が訓練をしているようすです。

▶関連ページ→P10

◇青い目の人形

昭和2年当時の新聞によると、滋賀県には135体の人形がアメリカから友好のしるしとして送られたそうです。

太平洋戦争が始まり、敵国から贈られたものだという理由で、人形が焼かれたりこわされたりしました。そんな中で、人形には罪はないと考え、かくすなどして人形をまもった先生や地域の人たちがいました。現在、県内の小学校には、4体の人形が残されています。



写真は、左から甲南第二小学校、平野小学校、稲枝北小学校、日野小学校に残されている青い目の人形です。

▶関連ページ→P15

<体験談、資料、写真の協力をいただいた皆様>(敬称略・順不同)

芥川美栄子、浅岡利三郎、大海幸夫、大依久人、尾形重男、奥田博、尾崎泰治、上村清子、北島敬三、木津龍尊、木村貞男、木村ます、木本勇、神戸幸子、小竹友吉、小林育三郎、小林幸子、佐藤生寿、杉本加代子、角野重喜智、竹井静、武田倫江、田中潤吉、辻昭三、中川三治郎、中島孝治、中島伸男、中西一雄、西村晃、西村安一郎、橋本武浩、長谷井よね、羽田昌次、藤井清子、水野道子、室谷昌夫、安田吉右衛門、由上龍男、吉坂ちる、浅井歴史民俗資料館、岩脇まちづくり委員会、伊吹山文化資料館、入江平拓土地改良区、大津市立堅田小学校、大津市立長等小学校、大津市立真野小学校、大津市立平野小学校、大津市歴史博物館、大原貯水池土地改良区、オーミケンシ株式会社、甲賀市立甲南第二小学校、サンライズ出版株式会社、滋賀県広報課、滋賀県水産試験場、滋賀県立水口高等学校、浄観寺、高島市教育委員会(撮影者:石井田勘二)、長浜市木之本支所、長浜市企画広報課、長浜市立高月図書館、西岡写真工房、東近江市立御園小学校、彦根市立稲枝北小学校、彦根市立城南小学校、日野町立日野小学校、栗東歴史民俗博物館

◇召集令状と戦死公報

軍隊に入るようにという召集を通知する書類のことを召集令状といいます。召集令状は役場を通して本人が家族に配達され、召集令状がくると、入隊をことわることはできませんでした。召集令状は、紙の色から赤紙といわれることもあります。

戦死公報は、家族に戦死を知らせるもので、役場から配達されました。

▶関連ページ→P7・P8・P11



(上) 臨時召集令状
(中) 充員召集令状
(下) 戦死公報

◇列車壕

戦争末期、空襲から蒸気機関車を守るための防空壕として、米原市岩脇山に2ヶ所の列車壕が掘られました。

そのうち1カ所は、入り口が幅約3m、高さ約5mの大きさを、岩山の中を130mの長さまで掘り進められました。2カ所の列車壕が完成する前に戦争が終わったので、実際に機関車を避難させることはありませんでした。



▶関連ページ→P17

◇焼夷弾

通常の爆弾は、爆薬を爆発させて、爆風や熱、破片によって人や建物に被害を与えます。焼夷弾は油などを使った爆弾で、人や建物、地域一帯を焼き払うために使われました。

写真は、昭和20年5月に、彦根市田原町に落とされた焼夷弾。(鉄製、直径約8cm、長さ約50cm)



▶関連ページ→P17・P18

図書・ホームページの紹介

図書の紹介

『戦争なんか大キライ』1～3

おじいちゃんやおばあちゃんが話してくれた戦争中の話をまとめています。戦争中の学校のこと、地域のこと、戦場のこと、みんなにも戦争のことを考えてもらって、戦争なんか大キライで、平和が大好きな大人になってほしいという願いをこめて、本をつくりました。ぜひ読んでみてください。



ホームページの紹介

戦争のころ使っていたものや、着ていたものの写真や戦争体験者の話などを見ることができます。調べ学習の方法や年表、地図なども紹介しています。ホームページ上で『戦争なんか大キライ』を読んだり、戦争体験談のアニメーションを見たりできます。また、体験談をまとめた『記憶の湖』という本を紹介しています。



滋賀県平和祈念館では、戦争に関するいろいろな資料をおつめたり、戦争体験のある人たちのお話を記録したりしています。

おじいちゃんやおばあちゃんが話してくれた戦争中の滋賀県のこと、当時の人たちが体験したことをもとにして、この本をつくりました。つらくて悲しい話が多いけれど、みんなにも戦争のこと、平和のことを考えてほしいという願いがこめられています。

もちろん、この本に書いていないできごとがたくさんあります。当時の人たちの体験を聞いたり、戦争中につくられたものを探したり、滋賀県平和祈念館で展示を見たりして、学んでいきましょう。

滋賀県平和祈念館学習用小冊子編集委員会(敬称略・順不同)

委員長	清水 弘孝	大津市立南郷小学校
編集委員	浅見 佳代	近江八幡市立金田小学校
	岡本 賢治	近江八幡市立岡山小学校
	小林 高章	甲賀市立小原小学校
	林 耕平	日野町立日野小学校
	福本 正澄	東近江市立聖徳中学校
	水谷 哲郎	草津市立松原中学校
	久保田重幸	滋賀県教育委員会
事務局	饗庭 一弥	滋賀県平和祈念館

(所属は、平成24年3月現在)
※改訂は滋賀県平和祈念館が行いました。



滋賀で学ぶ戦争の記録

平成24年(2012年)3月発行
平成27年(2015年)3月一部改訂
編集 滋賀県平和祈念館 学習用小冊子編集委員会
発行 滋賀県平和祈念館
〒527-0157 東近江市下中野町431番地
TEL. 0749-46-0300
FAX. 0749-46-0350

Copyright©2012 滋賀県平和祈念館 All rights reserved.